説教余滴 2020 年 1 月 26 日、寒中、春を想う

二十四節気では大寒の最中です。七十二候では、７１候で、「水沢腹堅」みずさわこおりつめる、とされます。大寒は、寒さの極まる時。沢の水も張り詰めて春の訪れを拒むかのようです。その直前、７０候は「款冬華」ふきのはなさく,とされます。歌人は記します。

「蕗の花のあかるい緑色は、まさに春色。
一生懸命伸びて、
お日様に当たろうとする姿が愛おしい」。

南北に細長い国土の日本。全国一律の気候にはなりません。恐らく平安の都、京都の気候を基準としていたのでしょう。陰暦・京都の気候は、二十四節気・七十二候がよく当てはまる、と感じました。札幌の暮らしの中では、ちょうどリアルタイムでした。少し寒さが緩み始め、７０候に気付き、慌てて車を走らせました。蕗の葉をよく見る陽当たりのよい赤土の斜面。ありました。残念ながらすでに伸び過ぎ、ほうけていました。春の香りはあるかな、と思い手に取りました。盛りは過ぎていてもまだ残っていました。

大寒の末候は七十二候の最後、月末から月初にかけて７２候になります。
「鶏始乳」にわとり　はじめて　とやにつく、と読むようです。「日によっては、春をほんのり感じる日も。このころ、鶏が卵を産みます」。
多くの鳥類は、この頃繁殖を始めます。そのため、路上のゴミ袋が荒らされます。札幌では雪の上に散乱していました。まだ自然が残っている徴でしょう。卵は、すでに一年中供給されるようになりました。人間の都合に合わせて、鶏の生き方が変えられてしまっています。暖房と栄養・給餌によって、自然の営みを変えることができます。鳩小屋に農業用ビニールをかけて風を防ぎ、餌を黄変米に代えたら、繁殖が増大しました。
少子化のため、社会政策立案が困難といわれます。国民は、この国の将来に、市民生活の先行きに不安を感じているのです。